

三重大学 人文学部

法律経済学科

「協同組合論」

特殊
講義



青木 雅生／三重大学人文学部教授

未来を生きていく自分にとって、
社会をどう捉えていくのか、協同組合論を通して考える

第15回（1月30日）：受講43名（受講生40名・聴講&スタッフ3名）

青木雅生教授（代表講師）による最終講義は、協同組合論を通して社会とその時代を生きていく自分はどう考えるのかの提起で講義が展開されました。

賀川豊彦の精神「生協（協同組合）は、事業と同時にたすけあいの組織であり、明日をきり拓く運動である」ことが現代的に捉え直される。青木教授がメッセージを交えて語られました。

【講義の主なポイント】

- 1) 本講義「協同組合論」の概要、改めて協同組合とは
 - ・ サードセクターとしての協同組合—社会をささえる一つのしくみ
 - ・ 資本主義経済が進展する中で協同組合の相互扶助・相互自助の必要性
 - ・ 協同組合は地域社会に関与してこそ、その力を確認されたといえる
 - ・ 協同組合間協同で、地域の未来をきり拓く
- 2) 協同のもつ力と可能性—協同により地域と人のつながりを活かす
 - ・ 人と地域のつながりで、市場を是正し品質を高める
 - ・ 制度の隙間を埋め、対応力を高める
 - ・ 個人の尊厳を尊重する
- 3) 協同組合および社会共生の担い手・主体について考える
 - ・ 市民の課題が一番よくわかるのは市民（当事者性）—本来、人が持つ協同性が発揮されないのはなぜなのか
 - ・ 人間の本質を科学性・共同性・主体性の総合と把握する—「知る・学ぶ・分かる」が必要となる
 - ・ 総合力の発揮と、共益と公益の両方の追求—排除する社会から包摂へ
- 4) 協同組合および社会共生のための課題
 - ・ 現在の延長線上だけではない取り組みとして、発想の転換と仕組みづくり

第15回講義…受講生の感想レポート (一部抜粋)

Aさん (3年生)

経済的、社会的弱者が手と組むのが協同組合であり、それは、自助が前提であり、相互自助により、成し遂げることが意図である。消費者は生産者の、生産者は消費者の、それぞれ互いの事情(どのように食べているのか、誰が作っているのか)を熟知するようになることにより、関係性を構築できると考えられる。

協同組合の活動の中で、地域経済が回っていて、消費者に安心、安全を提供している。人と地域のつながりを考えることは、大事でこれから先の高齢化社会では、さらなる課題であると思う。人とのつながりを実感しながら、コミュニティを強固なものにし、協同組合だけでなく、地域の企業なども一者になって、全体を高めていくことが重要ではないか。「尊重」とはそれぞれ関係があるが、もう一歩踏み込むことが大切である。課題を一番わかっているのは、市民である。

Bさん (3年生)

協同組合の特色として、当事者たちが問題を解決するための自発的な支え合いを重視していることが挙げられる。それは、人々が社会を作りあげていく過程における人々の姿勢に通ずる部分がある。当たり前になっていることは、その姿勢について考える機会が少なく感じる。

現在は、ただ生きているだけで、国家に対して能動的になりからずあり、自分自身の存在価値や可能性を肯定するのは難しい社会だと思う。協同組合をはじめとする、今ある仕組みの背景には、能動的な人々が存在しているのに、それが世代を超えて周知の事実になっていくのは難しいのだから、思った。

協同組合でしかできない役割はあるし、それは他セクターが抱えることはできないと思うが、だからその内側の活動にとどまるとはいけな。協同組合原則として「地域への関与」が新たに加わったように、組合外への活動や他セクターへの影響を身えていくことで、協同組合の意義が見えてくると思う。若しど者同士が小さな世界で支え合うしかないことは、善と可成りではない。当事者が集まることで、問題を解決する力を得られることを伴う組織として協同組合が広まってほしい。

Cさん(4年生)

高齢化や、教育・貧困など多くの問題がある中で、協同組合の必要性を感じた。

もたね合うのだけではなく、互いに支え合い、それぞれ自らが強くなる相互扶助、相互自助という考えの中で、自分がいかにできるかを改めて考える必要があると感じた。

Dさん(2年生)

協同組合は、組合員や地域住民が自助・共助によって支えあうことで成り立っている組織である。富利を目的とせず、企業や行政の手が届かない諸問題に取り組んでいるので私たちに必要は存在だが、協同組合について理解している人が少ないことが課題である。助け合いの組織だからこそ、自分たちが組合の一員として自助・共助していくのだという意識を広めていく必要があると考えられる。

協同組合は人と人とのつながりをもたらし、地域の過疎化・高齢化が進んでいる現代では今後さらに重要性の意味をもつようになると思われる。また、世代に関わらず人と人のつながりが薄れている傾向にあるので、協同組合の理念や精神によりいそう理解されるべきである。自分が当事者だという意識を持ち、社会をよりよくしていかなければならないと感じる。

Eさん(2年生)

協同組合の外と見える地域社会にも積極的に関与していくことが原則とも思われるが、そもそも地域社会のためには協同組合が存在しなくてはならない。地域への貢献は必然性があるから感じられる。

ある事業を行政がたり、行動をすれば獲得ばかりで考えればいいのかあるか、お金だけじゃ測れない何かでいい幸福感とか、人生に於ける豊かさもあつていい、その実感を協同組合での活動を通じて得る何かでいいと思うのか、協同のむか可能性の1つであることを学んだ。

Fさん(4年生)

地域での清掃活動や、野性生物の保護などなど、世の中では、様々な問題が提起され、これの解決のためにはたらく人がいる、という情報には触れつつも、自分が何かしたことはなかったことを思い出しました。社会的な課題に対する市民像としては、自分は「気づいても何もしない人」で、反省すべきな人だと思います。この現状を耻ずかしく思い、少しづつでも何か行動を起こしたいなと、今日の講義を聞いて思いました。

Gさん(2年生)

今日の講義では、様々な協同組合について学ぶたびに地域を包括的に支援する幅広い事業に驚く一方、職員をはじめ、組合員の方、地域の方が自らが進んで、地域貢献のための活動し、お互いに助け合って活動する姿をずっとどこか他人事のように思っていた。なせあんまりお互いに助け合って活動ができてくるのか、私にはあまり分からなかった。しかし、今回の講義において、自分だけができてはいけないことがある、ということを実感しているからだと思います。

今の社会は便利であり、人と人のつながりが希薄である。そのせいで自分だけができないことを自覚せざるを得ず、他の人への助けの重要性が分かりにくい。特に、今組合員が多くを占める年齢が高い方は、人と人のつながりの重要性を知っている。だからこそ、組合員同士で話し合えることで、地域で活動をして地域内のつながりを強いものにして、自分たちの生活を良くする、という良い循環が生まれる。

大きな話になってしまっているが、私たちの世代が「人と人のつながりを大切にして、協同組合がかけがえのない相互自助を行うことで、色々と日本の社会問題の解決に貢献している」というのはいいかと考えた。

Hさん(2年生)

協同組合員の高齢化という課題は、いずれの協同組合でも見られたように思いますが、今後若年層の組合員を取り込むには、刻々と進化する技術や社会に対する柔軟に適応していくこと、例えば電子決済の利用や、SNSの活用は必要ではと思っています。地域や人とのつながりに人間味のある協同組合は今後の日本の社会に必要不可欠です。その活動を淘汰させるために「自助・互助」という本来の理念を見つめ直し、自主性をもって関わっていくことが必要だと感じています。